

令和4年度 豊橋技術科学大学第三年次入学者選抜学力検査問題

一 般 科 目 (国 語)

注 意 事 項

- 一 試験開始の合図まで、この問題冊子と解答用紙を開いてはいけません。
 - 二 問題冊子の枚数は、表紙、草稿用紙を含めて二十二枚です。解答用紙は六枚あります。
 - 三 問題は大問が四問あります。全問解答してください。
 - 四 解答にかかる前に、すべての解答用紙の所定の箇所に受験番号を記入してください。
 - 五 解答は必ず解答用紙の所定の欄に記入してください。所定の欄以外に記入した解答は無効です。
 - 六 解答は楷書で正確に書いてください。判読に迷うものは不正解とすることがあります。また、選択肢の解答に際して、カタカナをひらがなに変更するなど、次のような改変は不正解となります。
- (例) ア ↓ あ A ↓ a
- 七 落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあれば、ただちに申し出てください。
 - 八 問題冊子の余白は、草稿用として使用しても構いません。
 - 九 試験終了時刻まで退出してはいけません。
 - 十 問題冊子は持ち帰ってください。

(草稿用紙)

「二」 以下の文章を読んで、問題に答えなさい。

自然科学は、人文科学や社会科学と違って人間の価値判断から解放されているという特徴をもっている。自然科学では、扱われる対象としての事実群が観測者たるわれわれに冷厳に強制することだけがらを、われわれが受け取り、それを処理すればよいのであつて、たとえば歴史を編む場合のように、事実の認識や選択に、人間の「あ」の操作が入り込む余地はない。このような自然科学のもつ「①没価値性」こそが、今日自然科学の、全地球的な普及、つまりは歴史的な時間と空間とを超越した全面的な普遍性の基盤となるものなのだ。

②自然科学の特性を語る場合に、価値の問題が絡むと、つねにこの種の議論が現れる。これほど素朴な形はとらないとしても、科学と価値を巡る議論のおおむねの骨子は、科学の「い」性」を「没価値性」に重ね合わせることが多く、それを出発点として、さまざまなヴァリエーションが出てくることになる。

一つの例を引いてみよう。一九六八年六月のある日の『ニューヨーク・タイムズ』は、ガリレオ裁判事件（注1）に関して、現在カトリック教会の権威筋がその再検討を考慮し、ガリレオの復権を目ざして活動に入っていることを報じ、オーストリアのコーニツク枢機卿がノーベル賞受賞者の晩餐会の席上でこの件について語った談話の一部を紹介している。

コーニツク枢機卿は、ガリレオ事件が、科学と宗教の問題を真面目に取り扱おうとする人々にとって、③クジユウに満ちたものとなつて、④率直に認め、とりわけ教会が、精神・思想の自由と、偏見を乗り越えた正義とを主張しようとする第二ヴァティカン公会議の精神にのつとるとき、ガリレオ事件は、あらゆる制限を⑤テッパイして、自由に、徹底的に解明しなければならぬし、そうすることが、信仰者の正しさを究極的に立証するための一つの機会ともなる、と主張する。

そして、科学と宗教との協力関係を樹立するという面に焦点を絞つたとき、⑥今日の神学は、「本質的な神の啓示」による知識と、「哲学的な思索」による知識と、「現実を無私の心で眺めたときに得られる素朴な知識」の三者を、ガリレオ時代よりもはるかに鋭く峻別し、これを混同しないという出発点から、問題を解明しようとしている、とコーニツク枢機卿は指摘する。

ガリレオ事件、つまりは、あの悪名高い宗教と科学との「対立」もしくは「抗争」、もう一度言い換えれば、「う」的な価値の世界と「え」的な事実の世界との間のせめぎ合い（と言われるもの）を例に引いたのは、あとあとの議論にも関わるものが、そ

のなかに含まれているからであるには違いないが、しかしここではそうした問題の本質はひとまずおいて、コーニック枢機卿が分別してくれた三種の知識に着目してみたい。

察するところコーニック枢機卿は、第三番目の知識のカテゴリー、すなわち④「現実を無私の心で眺めたときに得られる素朴な知識」と、自然科学の知識とを等置して考えていると思われる。そうした考え方のなかには、「現実」はユニークであり、それを「無私の心」つまりあらゆる先入観や偏見から解放されてひたすら③キョシン坦懐たんかひに眺めたときには、自ら一なる「現実」の姿が、だれの眼にも一様に映じ、誰にもそれを「素直に」理解することができはるはずである、とする強い確信がある。

この確信、信念は、まさしく近代に特有のものである。

改めて論ずるまでもなく、近代は、神学から哲学が分離し、哲学から自然科学が分離したうえで、それぞれが、お互いの守備範囲を確認し、相手の守備範囲を侵害しないという不可侵条約を締結した時代であったと言つてよからう。そして、ブルーノ（注2）や、ガリレオや、その他⑤「科学と宗教の闘争史」を飾る数々の事件は、そうした不可侵条約が結ばれる以前の、不幸な相互の権利の侵害によって惹き起されたものであり、そうした不幸な事件を克服するためにこそ、お互いに守備範囲を遵守することがとめられた、という歴史的事情が、一方に存在するのはたしかであろう。

そのとき、科学の守備範囲は、「現実」との素朴な接触によつて得られる「お的な」事実の世界のみに限られる。一方、哲学的な構築は、そうした事実群から成立している自然科学的な知識のうへに、か的な作業によつて築き上げられるという知識のヒエラルヒーが存在することになる。そして最後に神の啓示は、前二者のような「人間的な」種類の知識とは別の源泉から、別の方法によつて、人間存在の①シンオウを撃つものとして指定されるわけである。

啓示の問題については、ここで論ずるのを控えよう。だが、コーニック枢機卿の言うごとく、⑥客観的世界と主観的世界とを、近代がこのように弁別したことによつて、科学と哲学の両者は、その守備範囲のなかにいる限り、お互いにわずらわされずに、独自に発展・展開することができると考えられたのであり、いわば、科学、哲学、神学は、中世における三者の一体的状況を②ダツキヤクして、それぞれが、専門化、独立化の途をたどることになったと言えよう。

このような図式のなかでとらえられる場合、自然科学の扱う世界、またそれによつて構築される世界が、すべての偏見や先入観や価値観から自由な、無色透明の、中立の……つまり一言で言えば「没価値」的な性格をもっていることは、ほとんど必然的になつてしまはずである。

たしかに、その三種の知識を区別して、それぞれの範囲のなかで、閉鎖的な自律性を

保たせ、なかんずく、科学的知識のカテゴリーに「き性」という特性を与えて他と区別することのもつある意味での妥当性を、私も否定はしない。その妥当性とは、いわば「機能的な」観点からの、という但し書きの付いた妥当性と考えてよいだろう。

だが、⑦そうすることによって、科学的知識を、すべての価値の問題から切り離し得た、と考えるとすれば、それは、話を「機能的な」議論に限定している場合はともかく、「本質的」には大きな錯覚ではなかつたであろうか。

村上陽一郎『近代科学を超えて』（講談社学術文庫 一九八六年）より
なお、出題の都合上、一部省略した箇所がある。

（注1） ガリレオ裁判事件

近世イタリアの科学者、ガリレオ・ガリレイ（一五六四〜一六四二）が地動説を唱えたことによりカトリック教会に裁判にかけられ、有罪となり死ぬまで自宅軟禁となった事件。当時のカトリックの教義では、天動説が正しいとされていた。

（注2） ブルーノ

ジョルダノ・ブルーノ（一五四八〜一六〇〇）のこと。近世イタリアの哲学者。地動説に基づいた宇宙観を唱えたためにカトリック教会から有罪判決を受け、一六〇〇年に火刑となった。

問一 傍線部①～⑤の語彙と同じ漢字を含む語彙をそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

① クジユウ

ア 香辛料 イ 味噌汁 ウ 渋柿 エ 悠久 オ 重点

② テツパイ

ア 徹夜 イ 敗北 ウ 鉄道 エ 撤兵 オ 配布

③ キヨシン

ア 拳動 イ 信号 ウ 神経 エ 虚構 オ 根拠

④ シンオウ

ア 真剣 イ 新居 ウ 奥地 エ 往復 オ 探索

⑤ ダツキヤク

ア 脚色 イ 閑却 ウ 顧客 エ 確認 オ 法悦

問二

あ

く

き

には、A 客観か B 主観のどちらかの語彙が当てはまる。それぞれにどちらか適切なものを一つ選び、AかBを記入せよ。

A 客観 B 主観

問三

傍線部①について、「没価値性」という言葉はここでのどのような意味で用いているか。その例として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア スマホを持っていれば生きるために必要な知識や情報は手に入る。

イ 野球選手が時速一七〇キロを超える投球はできない。

ウ 今日は満月なので、明日から欠けていく。

エ TOEICのテストで九〇〇点以上とれる人は英語に不自由しない。

オ 法律・刑罰を厳しくしたら犯罪が減る。

問四

傍線部②について、その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 自然科学は人間の見方や解釈から中立的に、自然そのものがもつ固有の活動や性質を理解するという特徴を持っている。
- イ 自然科学は喜怒哀楽や情緒といった人間の生物的な性質を超えた普遍的な存在について考えることができるという特徴を持っている。
- ウ 自然科学は歴史や法律、経済のような人間の社会活動よりも高次な動植物や天地の活動を分析可能とする特徴を持っている。
- エ 自然科学は宗教や神仏といった存在を否定し、人間の理性によって万物の法則を理解可能なものと捉えられるようにするという特徴を持っている。
- オ 自然科学は観測することなしに論理的な精神のみに従い、世界の仕組みや謎を説明することができるという特徴を持っている。

問五

傍線部③について、「今日の神学」はどのような姿勢であると指摘しているか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 今日の神学は、精神・思想の自由と、偏見を乗り越えた正義とを重要なものと考えており、宗教的な考え方を柔軟に適応させようという立場をとっている。
- イ 今日の神学は、神は人間活動や自然科学の領域を超越した存在と考えることで、下位の存在の活動がどんなものであれ、そこに干渉しないという高踏的な立場を選んでいる。
- ウ 今日の神学は、神の啓示と哲学と素朴な知識とが、相互に独立した存在であることを確認し、並立しうるものと認める立場をとっている。
- エ 今日の神学は、宗教的な教えに固執すれば科学との対立・抗争を引き起こすだけであり、それは世界の安定を乱すだけであるという立場から、科学に対し譲歩をしている。
- オ 今日の神学は、宗教と哲学、自然科学とをはつきりと区別した上で、相互の関わりによって豊かになるよう配慮している。

問六

傍線部④について、「現実を無私の心で眺めたときに得られる素朴な知識」と、自然科学の知識とを等置して考えていると思われる。」とは、具体的にどういう意味か。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 長い歴史の中で、哲学と神の啓示とは対立的な関係にあつたが、情緒や感情を抜きにした無私の自然科学はそのような対立を回避し自然の法則を説明できると考えている。

イ コーニック枢機卿は、人間が社会経験や感情的な判断を排し、自然界の出来事をそのまま受け取って、その仕組みを解明することを自然科学における「素直な判断」だと考えている。

ウ コーニック枢機卿は、哲学の影響を受けると人は素直な心を失うと考えており、自然科学は素直な心とつながる学問だと考えている。

エ 自然科学の優位性が確定的となつた近代社会において、自然科学を「素朴」「無私」と定義することによつて、宗教との摩擦を減ずることができると考えている。

オ コーニック枢機卿は、無私、無欲の判断ができることが、宗教と対立しない自然科学の存在を認めることができる条件だと考えている。

問七

傍線部⑤について、「不幸な相互の権利の侵害」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 神学が哲学、自然科学に対して自らの絶対性、優位性を主張し、その内容に介入する一方で、宗教的世界観にとらわれず、哲学や自然科学も地動説の学説などを唱えたこと。

イ 宗教がその正統性を確保するため、教会権力や王権を利用して、学者の活動や研究に対し宗教的見解を科学的に裏付けるように要請し続けたこと。

ウ 宗教と哲学の対立から、本来独立していたはずの自然科学にまで宗教や哲学の見地・見解を反映させるような圧力がかかっていったこと。

エ 宗教的世界観を肯定さえすれば比較的自由的な研究活動を保証する、という宗教と哲学・自然科学の上下関係を構築しようとする動きに対して、哲学や自然科学が同調し、学術の発展が遅延したこと。

オ 宗教の絶対的支配に対して、哲学と自然科学から反発が強まり、それが力をつけてきた王権・市民階級による教会への反抗と同期して、宗教的対立と学術上の対立が同時に深刻化していったこと。

問八

傍線部⑥について、「科学と哲学の両者は、その守備範囲のなかにいる限り、お互いにわずらわされずに、独自に発展・展開することができると考えられた」とは、具体的にどういう意味か。説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 信仰心や感情といった物事に何らかの価値を見いだす思考法は自然界の法則を理解するためには障害にしかならず、それらと分かれて独立した分野となることで、自然科学は本当の研究ができるようになったということ。

イ 近代的思考が定着することによって宗教と科学、哲学と科学が相互の誤謬ごびやうを確認・共有した結果、それぞれが自由な発想で研究を進めることができるようになったということ。

ウ 科学と哲学とが自律的に進歩するためには、お互いの研究内容について介入・干渉したり否定し合ったりせず、それぞれの分野の中で研究をしていけばよいだろうということ。

エ 自然科学から宗教と哲学が分かれたことによつて、信仰や感情に左右されない合理的で中立的な思考と実験が行えるようになった結果、技術や科学が大いに発展することができたということ。

オ 科学と哲学は、お互いに関わりを絶ち、無関係な分野の存在であれば、十分に発展できるのであり、お互いに影響を与え合ったりしようとするれば高度な政治的問題に発展してしまうということ。

問九

傍線部⑦について、この文章全体から考えて、「大きな錯覚」とはどのようなことを指摘したのか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 自然科学の研究は客観的なものだと考えられていて、研究者の心情や社会情勢によって評価や判断が揺らぐものではないのに、その影響をうけ変化していく価値観のように捉えられているということ。

イ 自然科学を扱い、研究するという営みは、社会や感情、歴史的背景を背負った人間の活動の結果である以上、科学的知識と価値観や先入観とを完全に切り離して考えることはできないということ。

ウ 自然科学の技術的・機能的な側面を考えれば、主観的な価値観から完全に自由な学問領域のように見えるが、実際には、主観性が払拭されていない不完全な状態であり、真に客観的な科学にはまだ到達していないということ。

エ 自然科学をすべての価値の問題から切り離し得た、という発想が、そもそも宗教や哲学との「距離感」を前提にした考え方であって、その点で完全に独立し自立した学問領域とはいえなくなっているということ。

オ 自然科学が一切の価値観から自由な存在であるという考え方は、自然界の法則・仕組みが人間の存在とは無関係だということを前提にしているが、それは科学者の個性や人間性が反映したものであるということ。

「二」 以下の文章を読み、設問に答えなさい。

誤訳とは何か

異文化コミュニケーションの視点から「訳す」という作業を分析しようと考えたとき、当初は通訳のみに焦点を絞るつもりでいた。通訳にかんしての評論はすでにかなり出版されているのに、通訳にかんしてのものは非常に少数だから、というのが主たる理由であった。

しかし①を考えれば、通訳にしても翻訳にしても、ひとつの言語から異なった言語への変換、という基本は同じである。a、先に述べたように、翻訳・通訳のいずれとも明確でない訳す作業も多くあり、峻別することにさしたる意義も見出せない。したがって、「訳す」という営みを広義にとらえて異文化コミュニケーションとの接点を考察したほうが、本来の目的に沿うものであろう。

異文化コミュニケーションの観点から「訳」を考えるとときに、避けて通れないのが「誤訳」という問題である。

①だが「誤訳」の定義というのも、案外むずかしい。私たちはいとも簡単に、あれは誤訳だ、あの本は誤訳だらけだ、といった判定を下す。そして実際に、間違った翻訳や通訳は驚くほど多い。翻訳ものを読んでいて、どうにも理解できない難解な箇所があったら誤訳と思え、といわれるほどである。さまざまな誤訳を指摘した出版物も存在し、それを読むと、なるほどと思うことばかりである。

しかし、最近、何もかもひっくりかえして「間違った訳」とかたづけてしまつてよいのだろうか、という疑問もでてきている。

一九九三年八月、オランダ・アムステルダムで開催された国際応用言語学会第十回世界大会の通訳・翻訳理論部会では、この点がかなり議論になった。研究者によっては、世の中に「誤訳」などというものは存在しない、これは②「semantic transfer」と呼ぶべき性質のものである、と主張する人さえいた。ひとつの言語から、もうひとつの別の言語に変換する際、どうしたって意味上の転移も行なわれるわけであるから、原文と翻訳文が完全に同じものになることはない、という考えである。その考えに従えば、②従来はたんなる翻訳上のミスと考えられてきたものうち、少なくともいくつかは純然たる間違いではなく、「誤訳」というよりは、「ミスコミュニケーション」「コミュニケーション・ギャップ」と表現した方が適切なものかもしれない。

しかし、③「コミュニケーション・ギャップ」と表現を変えたところで、コミュニ

ニケーションの失敗であることには変わりない。意思疎通がうまくいかない、あるいはメッセージが正しく伝達されなかった、という結果であるならば、それを人呼んで「誤訳」というわけであろう。

誤訳は異文化との取り組みのあらわれ

外国語能力の根本的欠如、もしくは母国語であつても理解力や表現力の不足による誤訳は論外として、世にいう誤訳の大半は、おそらく異文化と取り組むこと自体に由来するのではなからうか。

翻訳をするにしても通訳を行なうにしても、④二か国語に堪能というだけではつとまらない。両方の言語圏の文化にも精通していなければ、翻訳であれ通訳であれ不可能といえる。それは、③言語と文化が切つても切り離せない密接な関係である以上、当然のことである。

言語は文化であり、文化は言語であるともいえる。⑤文化に対する認識が欠けたまま言葉のみを訳そうとすると、誤訳が起きる。正確に訳そうとするならば、言語レベルを越えた文化の理解が不可欠である。通訳・翻訳理論を研究しているスネル＝ホーンビー (Mary Snell-Hornby) は「それを“bilingual and bicultural”(二言語・二文化)と定義している。

⑥この定義は、日本語のいわゆる「バイリンガル」を指すものではないと考える。なぜなら、④外国で長期間を過ごした帰国子女が必ずしも翻訳や通訳に適しているわけではないし、優秀な通訳者または翻訳者には、かえって外国滞在の経験がない、純国産が多いからである。これはおそらく、通訳にせよ翻訳にせよ、最終的には母語の能力が決定的な要素を持つ、ということと関係があるのだと思う。つまり、見逃されがちなことではあるのだが、訳すという作業には母語が絶対に必要なのである。母語あつての外国語ともいえる。だから、帰国子女なら大丈夫だろう、と簡単に考えて通訳を頼んだら失敗した、ということが起こりえる。

①母語だけでは訳すという行為自体が成立しなくなる。「二言語・二文化」とは、外国語に訳す、あるいは外国語から訳すためには、母語と同レベルの知識と理解が、対象言語および文化にかんしても必要、ということである。すなわち、「訳す」という行為を言語の次元のみで考えることは間違いであり、「訳す」とは、異なつた文化の橋渡しであり、異文化を越えてメッセージを伝えることである、という概念である。

「⑤翻訳者は反逆者」(Traduttore, traditore) という格言がある。翻訳は所詮、翻訳である、原文を忠実に伝えることは不可能、という達観した見方である。たしかに、言語を

そのまま理解できれば、それに越したことはない。

⑥現実には、世界中のあらゆる人間が複数の言語を操り通訳や翻訳は必要としない、ということとは夢物語である。それどころか、インターネットなどマルチメディアの発達とともに各種の情報が地球を駆けめぐり、正確にして迅速な情報を得る必要性はますます高まっている。また、高度情報社会にあつて人間的な接触の重要性もますます認識されてきており、人的な交流がなくなってなくさかんになっている現代は、多文化・多言語の時代でもある。通訳や通訳が不要になるどころか、⑤その必要性が増している。「通訳は反逆」とすましてはいられないのが現実である。

鳥飼玖美子『歴史をかえた誤訳』（新潮文庫 二〇〇四年）より

問一

① ～ ⑤ に当てはまる最も適切なものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- ア いつそう イ 突き詰めて ウ いくら
エ たんに オ すべからく

問二

㉑ ～ ㉓ に当てはまる最も適切な語彙をそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- ア ただし イ むろん ウ しかし
エ まして オ したがって

問三

傍線部①について、筆者が「だが「誤訳」の定義というのも、案外むずかしい。」と考えているのはなぜか。その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 「訳す」とはコミュニケーションの一種であるので、意図が通じれば問題や間違いは生じないと考える研究者も多いから。

イ 翻訳や通訳は担当する翻訳者や通訳者によつて表現の方法や文体、伝え方が変わるの、間違いを指摘するのは困難だから。

ウ 翻訳と通訳の区別が難しいものがあるように、誤訳か誤訳でないかの区別もあいまいで断定はできないから。

エ 文法的にあきらかな誤訳だけでなく、翻訳・通訳の過程で意味の変化が起きることもあるので、ある翻訳・通訳が正しいのか、間違っているかを簡単に決定することは困難であるから。

オ そもそも異文化の言語を完全にほかの言語に置き換えるということは不可能なので、全ての翻訳・通訳は意味が通じると同時に誤訳でもあるから。

問四

傍線部②について、筆者が「誤訳」というよりは、「ミスコミュニケーション」「コミュニケーション・ギャップ」と表現した方が適切なのかもしれない。」と考えているのはなぜか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 異文化交流が活発な欧州では、「誤訳」とはコミュニケーション上の誤解によって生じるものであり、意味内容の間違いではないという考え方が広まっているから。

イ 「誤訳」とは、つきつめればコミュニケーションの失敗のことであり、内容理解や評価の失敗ではなく、伝え方の失敗が原因であるから。

ウ 翻訳・通訳の場面では、お互いの言語をいくら理解し配慮したとしても、意味の違いをとらえ損ねることによって、すれ違いが生じることがあるから。

エ ミスコミュニケーションあるいはコミュニケーション・ギャップは異文化間交流において必然的に起こる問題であり、その場での翻訳・通訳では「誤訳」が起こるのは当然のことであるから。

オ 異なる文化的背景をもつ人々が異なる言語によって交流する以上、その意味を完全に理解することは不可能であり、その際の理解のズレを「誤訳」と言っていたら翻訳・通訳の意味がなくなってしまうから。

問五

傍線部③について、筆者が「言語と文化が切っても切り離せない密接な関係である」と考えているのはなぜか。その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 言語を持つているのは人間だけであり、文明を持つているのも人間だけである。つまり、言語と文化とは、人間特有のものなので、そこには強い影響関係と相互補完関係が存在しているから。

イ 言語の内容が膨らみ、発展していくためにはその言語を使う社会の文化も発展していかなければならず、文化の性質・内容が言語の性質・内容に大きな影響を与えるため。

ウ コミュニケーションの場ではお互いの経験してきた文化的背景を理解することが最も重要であり、言語はそのようなお互いの抱えている文化を相手に伝えるための手段であるから。

エ 言語はその言語を使う社会集団の性格や文化の特質を決定づけるものなので、その文化の内容を自分の中で確定的に定義できなければ、異文化社会の言語をきちんと使いこなすことはできないから。

オ 言語は、ある文化の中でのみ意味を持つものであり、文化を切り離して言語だけを理解できると考え、使用したならば、言葉の持つ様々な連関を把握することができず、十分な理解には至らないから。

問六

傍線部④について、筆者が「外国で長期間を過ごした帰国子女が必ずしも翻訳や通訳に適しているわけではない」と考えているのはなぜか。その理由として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 翻訳・通訳に必要な外国語能力とは、論理的・構造的な文法の理解と語彙の知識が基盤となるので、経験的・習慣的に身につけた外国語能力では、日常生活は支障がなくとも、学術やビジネスに必要な公的な言語を扱えるようにはならないから。

イ バイリンガルの帰国子女は、成長に合わせて二つの言語や文化に習熟する機会があるので、母語と第二言語の文化のどちらに自らを指定すべきか、迷ってしまいう可能性があるため。

ウ 子供時代に外国に長い間暮らし、ほかの言語を使い続ける経験をした人々の中には、その分母語を身につける機会が乏しかった人もいるので、外国語を理解できてもそれを適切な母語の表現に置き換えることが難しいことがあるから。

エ 外国滞在経験のない「純国産」の翻訳・通訳者の方が、異文化経験がないことを自覚する分、自文化と異文化の差異に敏感になるため、どちらも母語になっってしまった帰国子女よりも優れた翻訳・通訳を行うことができるから。

オ 帰国子女といっても様々であり、外国語の能力が高い人もいれば低い人もいるので、外国生活を経験しているというだけでできるほど翻訳・通訳は簡単な仕事ではないから。

問七

傍線部⑤について、筆者は「翻訳者は反逆者」という格言を、どのような意味だと考えているか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア ある言語の内容を、ほかの言語に完璧に置き換えて伝えるということは不可能であり、それを行う翻訳・通訳という行為は、元の言語とそれを支える文化と社会に対してはむかうようなものに見えるという考え方。

イ 社会と文化を象徴する「言語」というものを、ほかの社会と文化の言語に置き換えて伝えるという行為は、自分が属している社会と文化に対する裏切りのようなものだという考え方。

ウ 翻訳・通訳は、一つの言語のなかにこもっていた社会・文化を、ある意味強引に外部に対して開いて、交流をさせようという行為であり、閉じた社会に安定しようという思考に対する反対声明となるという考え方。

エ 翻訳・通訳は異なる社会同士をつなぎ、異文化交流を進めるために絶対に必要な行為であるが、同時にその交流はお互いの社会に大きな変化をもたらすものになるという考え方。

オ どれだけ誠実に翻訳・通訳を行ったとしても、完全に正確な内容をお互いに伝え合うことはできない以上、翻訳者・通訳者は常に双方に対して裏切り者のようなポジションになってしまうという考え方。

問八

傍線部⑥について、筆者の考えに即した内容のものはどれか。その説明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 世界中の人々が世界中にある言語を全て話せるようになるわけがなく、例えば英語を共通語にできたとしても、現在のような経済格差・教育格差が激しい世界では、学べる人々と学べない人々との間の交流が途絶え、階層の断絶が起きてしまう。その格差を解消するために、翻訳・通訳という行為は非常に重要なのである。

イ 言語や教育の環境は地域によって大きく異なり、全ての人が複数の言語を身につけられるわけではない。その一方で、グローバル化が進む現在、ビジネスや教育、観光などさまざまな局面で、人々の国際的な交流・共存は拡大の一途をたどっている。この状況で、異文化交流を支えるのが、翻訳・通訳なのである。

ウ インターネット、マルチメディアが発展し、AIによる自動翻訳・通訳が可能になりつつある中、人々は複数言語を学び、自由に使えるようになる必要はなくなる。そうすれば、異文化・他言語の人々と交流するたびに翻訳者・通訳者を呼ばずに済む。人間が多くの言語を学ばねばならないという時代は終わりつつあるのだ。

エ 言語の天才でもない限り、人間が身につけることができる言語の数は多くても二〜三言語である。異文化交流の場において、常に必要な外国語を使いこなせるようになりたいという目標はあまりに無謀であり、コストや雇用創出の側面から考えても、言語能力に優れた人々に翻訳者・通訳者として活躍してもらうほうが専門性・正確性において適切なのである。

オ 全ての人が複数の言語を身につけようとすると、どちらも不十分にしか使えなくなってしまう危険性がある。人々はまず母語の能力をきちんと身につけることを最優先にすべきであり、異文化交流の場においては、言語のプロに仕事を任せられた方が、適材適所の観点からも正しいのである。

「三」 次の(一)～(五)の単語の対義語となるように、二字の単語「□□」に当てはまる最も適切な漢字をア～コの中から一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、①と②、③と④、⑤と⑥、⑦と⑧、⑨と⑩は、各組み合わせが完成された場合のみ正解とする。

- | | | | | |
|-----|----|---|---|---|
| (一) | 大胆 | ↓ | ① | ② |
| (二) | 潤沢 | ↓ | ③ | ④ |
| (三) | 虚構 | ↓ | ⑤ | ⑥ |
| (四) | 独創 | ↓ | ⑦ | ⑧ |
| (五) | 小計 | ↓ | ⑨ | ⑩ |

ア	総	イ	模	ウ	渴	エ	病	オ	実
カ	臆	キ	計	ク	倣	ケ	事	コ	枯

〔四〕 次の(一)～(十)の文章の内容を表現しているものとして最も適切な四字熟語をア～コの中から一つずつ選び、記号で答えよ。

- (一) 私たち夫婦の中を取り持ってくれたのは、山田さんです。
- (二) 彼は世界一のロボット研究者になるという目標に向かい努力を重ねている。
- (三) 六十年前の子供向け怪獣映画を、このような優れた寓意を込めた社会派ドラマにリメイクするとは、あの監督は天才だ。
- (四) あんなにもめていた相続問題を、こんな見事に解決してしまうとは、大変優秀な弁護士だ。
- (五) スタンダード電機は、ライバルのユニバーサル工業より優位に立とうとこれまで何度も他社との合併や子会社の分社化を繰り返している。
- (六) どんなにお金に困っても、絶対に友人からはお金を借りないと決めている。
- (七) 司法試験に合格するまで禁酒する、と宣言したせいで、彼はいつもイライラして、結局勉強が進まなくなっている。
- (八) 社長は気まぐれで指示がころころ変わるので、社員はいつもひやひやしている。
- (九) ユニバーサル工業とスタンダード電機は国内シェアを争うライバル同士だったが、グローバル化に対応し生き残るために共同開発に乗り出した。
- (十) あの作家の漫画は、いつも最初の数巻は盛り上がりすぎて面白けれど、最後になるとうやむやで話がまとまらなくなるのが残念だ。

- ア 志操堅固
- イ 換骨奪胎
- ウ 氣宇壮大
- エ 自縄自縛
- オ 合従連衡
- カ 呉越同舟
- キ 朝令暮改
- ク 竜頭蛇尾
- ケ 月下氷人
- コ 快刀乱麻